自転車×キャンプに正解や
決まりはない。どんな自転車を
選んでもいいし、キャンプ道具の
積みかたも臨機応変。
だから面白く、繰り返すたびに
発見と変化がある。自分が楽しいと
思えれば、それが最高なのだ。

bicycle×camp

旅にふさわしい自転車とは?

用途ごとに最適化された多様なスポーツ自転車

もしすでに何らかのスポーツ自転車を持っているなら、それでためらいなく旅に出よう。近年は自転車用のバッグや、それを吊るすためのキャリア、各種のアクセサリーが進化していることもあって、どんな自転車も旅支度を整えることができる。特定の自転車に対して「それじゃ旅はできない」と無粋な断りを入れる時代ではなくなった。

もちろん、スポーツ自転車には用途に応じて考案された多くの車種がある。舗装路での快走を得意としたロードバイク、悪路の走破を目的としたMTB（マウンテンバイク）、両者の中間的な存在として乗りやすさを高めたクロスバイク、といった具合だ。極論すれば、いずれでもキャンプ旅にふさわしい装いを整えることができる。旅は競技ではないので、自転車の特性や性能に対して、あまりシビアに考える必要はない。

キャンプ装備を整えた多様なスポーツ自転車が同じ道に集う。旅の自転車選びに「正解」はなく、好みが最優先でかまわない。

たとえば、日ごろ舗装路しか走らない人が改めてMTBを買う必然性はないが、すでにMTBを持っているなら活用すべきだ。逆にロードバイクで悪路へ……となると物理的に走れないシーンも現れるが、そこは避けて別の道を進めばいい。昨今は、一見するとロードバイクながら太いタイヤを備えた「グラベルバイク」という新ジャンルも広がりつつある。これが最もキャンプ旅に適した機能・性格を備えた自転車といえるが、すでにあるスポーツ自転車で十分に旅は楽しめる。新たに購入する場合も、見た目などの好み優先で構わない。自由に選び、後述するキャリアやバッグで望ましい機能を付加すればOKだ。

ランドナー

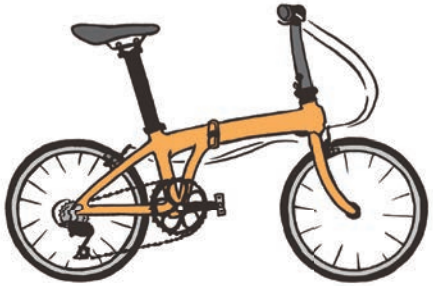
フランス発祥の旅行車。適度なスポーツ性と搭載力を両立し、1980年代までは旅の主力車種。美しいフェンダーとキャリアを備え、趣味性が高い。

クロスバイク

横一文字のフラットハンドルがもたらす扱いやすさが特徴。タイヤ幅は32㎜前後あり、シティサイクルと同じ感覚で乗ることができる。

折りたたみ自転車

ロードバイク並みに軽快なモデルがある一方で、折りたたんだ時の小ささを優先して「歩くより速い」くらいのモデルもある。多様なスタイルが魅力。



ロードバイク

多様な乗車姿勢が取れるのがドロップハンドルの長所。舗装路を効率よく進むため、幅23～30㎜の細いタイヤを履く。乗り味は硬めだが軽快だ。

MTB

幅50㎜以上の凹凸があるタイヤを備え、未舗装の悪路やトレイルを走破できる。衝撃を吸収するサスペンション機構を採用したモデルが多い。

グラベルバイク

ロードバイクに似ているが、幅32～40㎜の太いタイヤを履くためにフレーム各部の寸法に余裕がある。砂利道（グラベル）を進むこともできる。

キャリアレスの「バイクパッキング」

軽さが魅力の新しいスタイル

ここ5年ほどで普及したのが、キャリアを用いずにバッグを自転車の各部に直接吊るす積載スタイルだ。「バイクパッキング」と呼ばれ、もともとは北米のMTB乗りが荒野を旅するために考えたといわれる。バッグをベルトで自転車に直接くくりつけるという素朴な積載スタイル自体は自転車の創生期から存在したが、各社がバイクパッキング用のバッグを発売し、「システム」として手軽に利用できるようになったのは最近のことだ。キャリアを省けるので重量増を抑えることができ、その破損や振動を心配しなくて済むのがバイクパッキングの長所だ。

一方でデメリットもある。メインの収納スペースとなる大型シートバッグは、サドル下と車輪の間に十分な空間がなければ付けられない。フレームバッグを利用するには、フレーム三角内の広さが必要だ。つまり、バイクパッキングは小さなサイズのフレームでは導入するのが難しい。

大型シートバッグ

最大で15L以上の容量が確保できる。後方へ突き出すが、揺れないようにしっかり取り付ければ走行フィールへの影響は少ない。

フレームバッグ

フレームサイズと形状に合うバッグを選ぶ。フレーム三角内をほぼ埋めるタイプと、ボトルなどと共存できる細いタイプがある。

キャリアを併用

キャリアレスと呼ばれるバイクパッキングスタイルも、フロントキャリアとパニアバッグを併用すれば大容量を確保できる。

自転車の「空間」を利用する積載スタイル

サドルの下やメインフレームの三角内といった、自転車の構造によって生じている空間にバッグを装着するのが特徴だ。最大の重量物である乗り手に近い位置なので、キャリアを利用するよりも重量バランスがよくなり、軽快に走ることができる。ただし、個々のバッグの容量は限られる。大柄なキャンプ道具が必要な場合は、フロントフォークにラックを増設するなどして搭載スペースを補うことになる。シートバッグ上部のバンジーコードは、一時的に外したグローブや濡れたレインウエアの保持に便利なので、荷物スペースとして常用するのは避けたほうがいい。

自転車キャンプに最適な注目テント

近年はアウトドア用品全般の進化が著しい。その最たるものがテントだ。「自転車用」を謳うテントも存在する。しかし、自転車の一部をポール代わりにするなど奇抜な構造が裏目に出た製品が多く、山岳用テントの牙城を崩すには至ってない。現在ある自転車用テントでは、下に挙げたニーモのドラゴンフライ バイクパック1Pが出色の逸品だ。アルミ製ポールの折り数が多く、わずか30cmにまでたためるのがすばらしい。本体・レインフライと同じ袋にポールも収納できる。

軽さ優先なら、今も山岳用テントの独壇場。ダブルウォールの自立型で1kgを切るモデルも登場している。

自転車ツーリング用の高機能テント

ニーモのドラゴンフライバイクパック1Pは、自転車旅を前提にデザインされた希少なモデル。重量は一式で約1.3kgなので超軽量というほどではないが、ポールが非常に短くなるので搭載しやすい。本体はメッシュ生地を採用しているので涼しい。当然ながら寒い季節には不適。

ヘルメットやシューズの置き場として最適な収納スペースを前室に備えている。荷物が多い旅でもテント内を広く使うことができる。

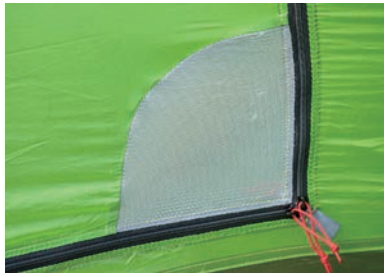
サブポールを追加することで、広々としたスペースを頭上に確保。アイウエアなど小物用の収納ポケットも充実している。

収納サイズと重量

①アライテントのトレックライズ0。ポール長は38cmでフレームバッグへの収納も現実的。重量約1.3kg。②ニーモのドラゴンフライバイクパック1P。ポールの短さが圧倒的。重量約1.3kg。③ヘリテイジのハイレヴォ。本体の小ささと1kgを切る軽さが際立つ。④モンベルのムーンライトテント1。ポール長が50cmあるので、その搭載にいつも頭を悩ます。重量約1.7kg。⑤テンマクデザインのワンポールテント。かさばる上に約2kgと重いが、ゆったり過ごしたい時に起用。

山岳用の超軽量テント

ヘリテイジのハイレヴォは、ダブルウォールの自立型テントとしては最軽量クラスで960gしかない。生地が薄々でポールも細身なので取り扱いに気を使うのは否めないが、荷物を削りたいのにテントは妥協したくない、という欲張りなサイクリストには最適だ。



一部がメッシュで1枚だけの入り口パネル。夏は風通しがイマイチで冬は冷えるが、やはりその軽さが魅力で出番が多い。

レインフライ・本体の生地は厚さ15デニール。手が容易に透けるほどの薄さだが、しっかり設営すれば強風にも耐えてくれる。

焚き火について

ひと手間がもたらす癒しの時間

焚き火がキャンプの醍醐味、という人は多い。薪をくべて炎を育てるという行為そのものが楽しく、揺れる炎には不思議な癒し効果がある。しかし、筆者は焚き火にあまり熱心ではない。まず、焚き火台という荷物が増えるのがネック。直火がOKというキャンプ場は例外的だ。最近はコンパクトな焚き火台も増えたが、ある程度しっかりした造りでないと太い薪を燃やしたり調理の補助に使うのは難しい。ノコギリや火吹き棒も必要になってくる。

薪が売ってないキャンプ場ではどうするか？という課題もある。薪を自転車に積むのはかなりしんどい。林や浜が近いキャンプ場なら枯れ木や流木を集められる可能性は高いが、運次第だ。

とはいえ、焚き火が魅力的なのは間違いない。暖かいので冬は実用的でもある。たまに娘がキャンプに付き合ってくれる時などは、喜んで焚き火台をバッグに追加する。

キャンプを彩る小さな炎

焚き火を眺め、その世話をしているだけの時間が尊い。薪は少しずつ様子を見ながら投入しよう。燃焼中は出歩かず、しっかり燃え尽きたことを確認してから就寝する。

薪を集める

管理人さんが常駐しているキャンプ場なら購入できるが、そうでない場合は周辺で集める。時間に余裕がある時の遊びでもある。

携帯用の焚き火台

巻いて収納できるスリムな焚き火台を使っている。薄いノートのように収納できるタイプもあるので、バッグに合わせて選びたい。

調理の補助に

食べ終わるまでグツグツさせたい鍋やおでんと焚き火は相性はよい。炊飯も可能だ。クッカーが煤で真っ黒になるのはしかたない。

火起こし

着火自体は固形燃料にお任せ。適度に風が吹いていれば何もせずに炎が育つが、火勢が弱い場合は火吹き棒で空気を送り込む。

キャンプ場の選びかた

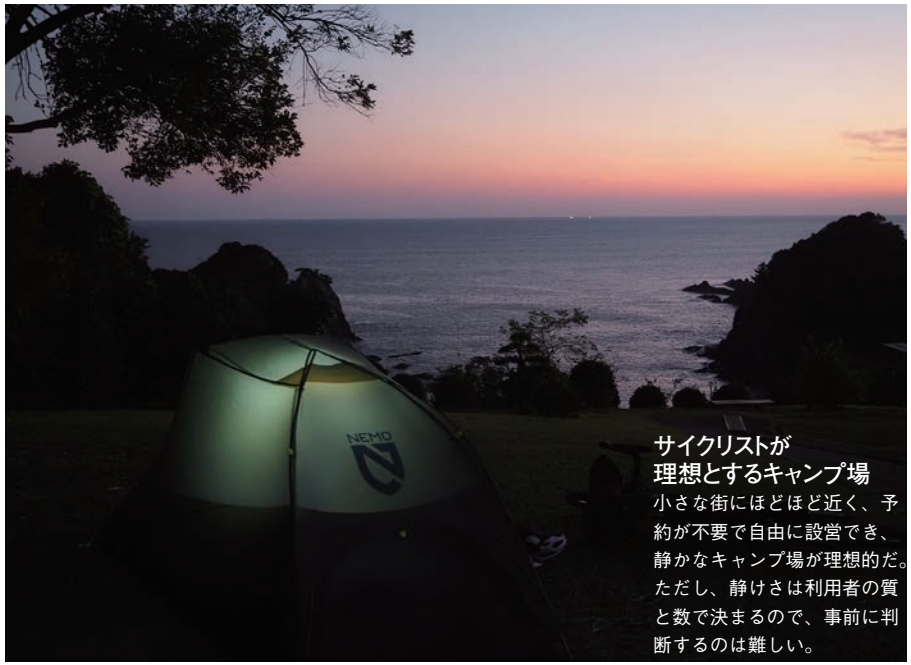
設備よりも立地環境が大切

道具をすべて持参する自転車キャンプの場合、トイレがあるだけの素朴なキャンプ場でも十分だ。キャンプ可の公園、といった場所も狙い目である。設備が整ったオートキャンプ場などを選ぶ必要はない。

旅したいエリアは決まっているがキャンプ場は未定、という場合は「市町村名+キャンプ場」でWeb検索すればどこかしら見つかる。昭文社の「ツーリングマップル」など、キャンプ場の記載が充実しているガイド地図も大いに役立つ。

自転車キャンプでは「買い出し」が必須に近い。特に飲料は重いので、キャンプ場の近くで調達したい。そのため、あまり人里を離れたキャンプ場は利用しづらい（あえて山奥や秘境のキャンプ場をめざすこともあるが）。初めて利用するキャンプ場は、予約する際に買い出し先の有無や距離を確認しておこう。自治体が管理する無料キャンプ場は予約がいらない場合も多いが、所轄部署に電話して最新の開設状況や店舗の有無を確かめておくと心強い。ネットの情報がリアルタイムで正しいとは限らないし、「2km手前の個人商店でビールを売ってますよ」など、具体的で確実な情報を得られるのが電話のメリットだ。

季節感もキャンプ場の選択を左右する。気温の高低を標高などの立地環境で補うと快適だ。シーズン限定で開くキャンプ場も多い。



サイクリストが理想とするキャンプ場
小さな街にほどほど近く、予約が不要で自由に設営でき、静かなキャンプ場が理想的だ。ただし、静けさは利用者の質と数で決まるので、事前に判断するのは難しい。

キャンプ場選び五箇条

- 食材を買える店舗や入浴施設が近い
- 設備は最低限で構わない
- 16時までに到着できる位置
- 平坦なコースが組める
- 予約不要だと気楽

夏場に選びたいキャンプ場

- 標高が高い→涼しい
- 緯度が高い→涼しい
- 海浜や湖畔→涼しい
- 混むキャンプ場は避ける

やはり夏は北海道の引力が強い。暑い日がないわけではないが、湿度が低いから爽やかで過ごしやすい。休みの都合が合えば、利用者が少ない平日がおすすめ。

冬場に選びたいキャンプ場

- 平地にある→暖かい
- 緯度が低い→暖かい
- 風を弱める木立がある→暖かい
- 有名キャンプ場でも空いてる

関東以西で平野部にあるキャンプ場が利用しやすくなる。全体としてキャンプする人が減るので、人気のキャンプ場も静かになって過ごしやすくなる。

どのバッグに何を収めるか？

使用頻度と重量で判断

バイクパッキング式のバッグは、取り付け位置と形状がさまざまだ。そこにキャンプ道具を合理的に収めるには独特のコツが求められる。

ポイントは、行動中に取り出すか否かと重量バランスだ。乗車中に手が届くフロントバッグやトップチューブバックは、補給食や道中で使うアイテムの収納に最適だ。自転車全体の重心に近いフレームバッグは、重い荷物を入れても安定する。シートバッグは容量が稼げるものの、その位置と形状から荷物の出し入れはしづらい。これらの特徴を踏まえて荷物を入れ分けていこう。

ウエストバッグ

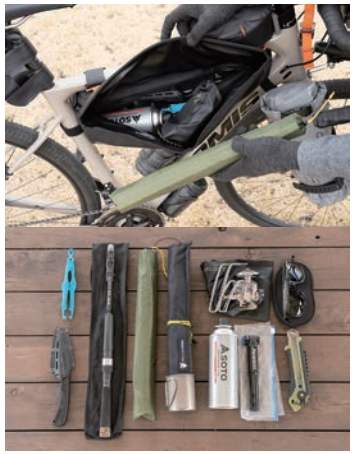
容量 ★★　バランス ★★★★
便利さ ★★★★★

スマホと財布だけならジャージのポケットで十分だが、カメラなどを持つ時はウエストバッグを利用すると便利。

トップチューブバッグ

容量 ★
便利さ ★★★★★
バランス ★★★★★

カギなどの小物や限られた補給食しか入らないが、何かと便利なバッグだ。ただし、ダンシング時に脚に触れることを敬遠する人も。



フレームバッグ

容量 ★★★　バランス ★★★★★
便利さ ★★★★

荷物の重さが影響しづらいスペースなので、バーナーなど小さい割に重い道具に適している。もちろん長尺物も収めやすい。

フロントバッグ

容量 ★★★★　バランス ★★
便利さ ★★★★★

手が届きやすく、取り出す機会が多い荷物に最適だ。ただしあまり重くしたくないので、寸法の割に軽い寝袋を入れることも多い。

フォークラック

容量 ★★★★★　バランス ★★★
便利さ ★

バッグに荷物が収まらない場合に利用。筒状になる道具が固定しやすい。テントの場合、シートを巻いて収納するときれいな筒になる。

シートバッグ

容量 ★★★★★　バランス ★★★
便利さ ★

バイクパッキングでは最大の荷室となるが、とにかく出し入れが面倒でコツを要する。キャンプ場でしか使わない荷物を入れよう。

調理レシピあれこれ

買い出しと調理を楽しむ

走っている間に考えていることの半分は、キャンプ場で何を食べるか？である。正確に言えば、利用できるスーパーやコンビニに着いたら何を買おうか？ということだ。あらかじめレシピを考えていることはまれで、店頭の品ぞろえと持ってきているクッカーなどを勘案してアドリブで決めることが多い。地方のスーパーに入ると見慣れない食材も多く、楽しみは尽きない。当然ながらキャンプ飯は夕食と朝食が対象だ。昼食は食事処に入ったり、コンビニで済ますことになる。

調理もソロが基本になるから、レシピうんぬんの前に、一人で食べ切れる量の食材を調達することが前提だ。最近はお一人様食材が充実しており、少量の肉やカット野菜を手に入れやすいのが助かる。いくら割安だろうと肉を1kgとか、白菜を丸ごと買ったりはできない。とにかく旅費を抑えたかった若かりし頃は、お米を何kgも買って毎晩炊いて主食にしたこともあったが、最近はツマミとしてのグレードが重要だ。ちょっといい肉を少し焼いたり、好みの食材を放り込んだ鍋をつつくことが多い。朝食は袋麺やパスタなどで手軽さ重視。作るのも食べるのも自分一人なので、どこまでも気楽だ。

キャンプは旅先の地に申し訳ないほど安上がり。せめて昼食くらいは奮発して、わずかばかりでも地元経済に貢献しよう。

四国で有名な「マルナカ」など、全国にはご当地チェーンの個性的なスーパーが多い。そこでの買い出しもキャンプ旅の楽しみ。

1 1合単位で持参

最近は少量のお米も入手しやすくなったが、自宅から1合単位で持ち出すのが無難。ジップロックに入れておこう。

2 浸水させる

1合に適当な水の量は200mLほど。メスティンの場合、取っ手のリベットなどを水量の目安にする。できれば30分ほど浸けておく。

お米を炊く

お米を炊くと、いかにもキャンプしてるな～と気分が盛り上がる。日本人の本能だろうか。腹持ちがよく、さまざまなレシピのベースにもなってくれる。メスティンなど炊飯用の飯ごうがあれば便利だが、一般的なクッカーでも問題なく炊くことができる。フタが浮き上がりやすいので、適当な石か、水を入れたカップを載せておくと、しっかり炊き上がる。「赤子泣いてもフタ取るな」と言われるが、炊飯の途中でフタを開け、水分の残り具合を確かめたほうが失敗は少ない。浸水と蒸らしに十分な時間をかけるのがポイントだ。

3 火にかける

沸騰するまでは中火で、湯気が出てきたら弱火にして15分ほどで炊き上がる。ほんのり香ばしい煙が立ち上がったら完了だ。

4 蒸らす

心配ならサッとフタを取って水気の残り具合を確認し、問題なさそうならタオルなどを巻いて保温し、10分ほど蒸らす。

5 ほぐす

底までしっかりほぐす。少し硬かったり、水っぽい炊き上がりになることも多いが、食べるのは自分だけなので気にすることはない。

いったんトウシキ野営場に入り、荷物を降ろして設営を済ます。がらりと自転車が軽くなり、自分がパワーアップしたような錯覚にとらわれる。

波浮港の精肉店に立ち寄り、地元高校生も御用達の特大コロッケで空きっ腹を満たす。がっついて2つ頼んだら持て余すほどのボリューム。

元は火口湖だったという入り江に作られた波浮港。小さな漁港だが、周辺にはスーパーやゲストハウスもあり、大島観光の拠点となる。

波浮港で奇跡のアオリイカ
黒潮が寄せる大島は魚影が濃い。ガチな釣り師は磯や船で挑むが、筆者は足場がよい堤防専門。それでも釣れるんだからたまらない。

大島は期待を裏切らない

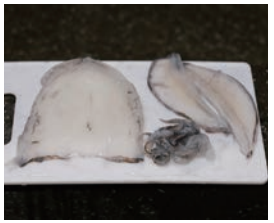
早くもお昼すぎには波浮港に着いた。感覚的にはあっという間に近い。波浮港は大島の南端にあり、「伊豆の踊子」ゆかりの小さな港町だ。そういえばお腹が空いてきたので、地元で人気の精肉店「鶏飼商店」でデカいコロッケを買い込んで昼飯代わりにする。男子高校生が何人か同じようにコロッケをほおばっている。のどかな光景だ。

もうトウシキ野営場は目と鼻の先にある。まだ14時だったが、ひとまずテントの設営を済ませる。従来はフリーチェックインだった施設も、現在は役場への事前予約が必要。密にならないよう、利用サイトを指定するためという。今回は他の利用者が1組しかおらず、ほぼ貸切だ。

荷物を降ろし、見違えるほど身軽になった自転車で波浮港にとって返す。いざ釣りを始めよう。1年前にふとしたきっかけで釣りに目覚め、それからは自転車×キャンプ×釣りといった三つ巴の旅に夢中だ。

筆者のメインターゲットはアオリイカ。沿岸性が強いイカで、自転車でアプローチしやすい堤防から狙える。美味であることは筆舌に尽くしがたい。しかし、この1年で数十回釣行したのに4杯しか釣れたことがないという惨状だ。すでに11月でアオリイカのシーズンも終わりつつある。いくら大島とはいえ、そう簡単に釣れるはずはない……と、思いつつも諦め切れずにエギ（イカ釣り用のルアー）を海へ投げ込んでいると、奇跡が起きたのだった。

分厚い胴は刺身に、ゲソは唐揚げにしていただく。適度な歯ごたえと上質な甘みに箸が止まらない。控えめに言って超絶のうまさだ。

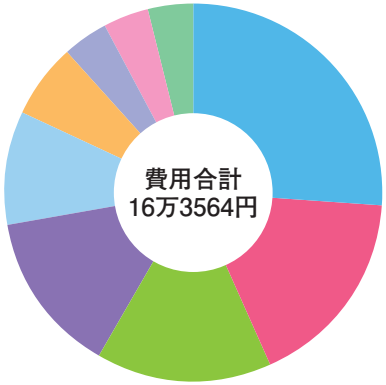

イカはさばくのが割と簡単だ。胴、ゲソ、エンペラ（ヒレ）に分ける。下手なので墨袋を破ってしまい少し黒ずんでしまったが、洗えば問題ない。

ご存命中のアオリイカは褐色だが、シメるとすーっと色が引いて透明に近くなる。釣れてくれて本当にありがとう。

自分が釣った（ここ重要）イカをつまみに晩酌を進め、ささやかな焚き火を楽しむ。これが幸せでなくて何が幸せなのだろう。

四国一周キャンプで選んだギア

- ① テント（ニーモ・バイクパック1P）
- ② テント用シート
- ③ 寝袋（シートゥサミット・スパークSp0）
- ④ レインジャケット（モンベル・サイクルドライシェル）
- ⑤ レインパンツ（モンベル・バーサライト）
- ⑥ レインシューズカバー
- ⑦ メモ帳、ペン、虫除け
- ⑧ バケツ（釣り用）
- ⑨ LEDランタン
- ⑩ モバイルバッテリー、充電器
- ⑪ シャンプー
- ⑫ まな板
- ⑬ 携帯リュック
- ⑭ ルアー
- ⑮ ヘッドライト
- ⑯ 偏光アイウェア
- ⑰ 三脚
- ⑱ 釣竿
- ⑲ リール
- ⑳ 保冷バッグ
- ㉑ ナイフ
- ㉒ 魚つかみ



長期キャンプ旅の予算感

20日以上の期間を考えると、たったこれだけ!?といった感じだ。往復の交通費と酒代を除けば、感覚的にはタダ同然で申し訳ない。

- 交通費：4万3110円
- お酒：2万7866円
- その他（釣具の補充など）：2万4622円
- キャンプ用食料品：2万2771円
- 宿泊費：1万6000円
- 外食：1万168円
- 行動時の補給食：6425円
- キャンプ場料金：6400円
- 飲料（行動時）：6202円

一周プラスαのテーマを

一周という距離を追求するテーマだけでは気力が途切れることもある。行きたい街、過ごしたいキャンプ場、そして会いたい人こそが旅を続ける糧になる……かもしれない。

20泊も1泊も道具は変わらない

意外かもしれないが、日程の長短は装備にさほど影響を与えない。釣りもしたので荷物重量は8kgを超えたが、いくらでも削れる状態だ。季節をまたぐほどの長期間の旅では装備の交換も必要だが、そうでなければ1泊キャンプができる道具で何十泊もOK。海外は経験してないのでわからないが、国内であれば少々のお金がすべてを解決する。宿泊施設を利用する日を設ければ充電もできるし、パソコンなどの発送を手配すれば、職種によっては仕事もできる（無論、避けたい）。

- ㉓ 輪行袋
- ㉔ ダウンジャケット（モンベル・スペリオダウンジャケット）
- ㉕ スリーピングマット（サーマレスト・ネオエアーウーバーライト）
- ㉖ 着替え（サイクルウエアー式、アンダーウエア）
- ㉗ テーブル（SOTO・フィールドホッパー）
- ㉘ バーナー（イワタニ・ジュニアコンパクトバーナー）
- ㉙ 風防
- ㉚ カセットガス
- ㉛ ポーチ（調味料・カトラリーなど）
- ㉜ クッカー（ユニフレーム・山クッカー角型3、チタンカップ）

もっと楽しむための軽量化

「軽さ」がかなえる新たな遊び

ここまで軽量化・コンパクト化の方法を紹介してきたが、それによって生まれた「余力」をどのように使うかが本題であり、もっと楽しい時間へと結びつけたい。

筆者には軽量化の恩恵で見直すことができた自転車がある。「ランドナー」だ。本来は日帰りや宿泊まりといった小旅行を楽しむための自転車で、1980年代まではツーリング車の代表だった。その端正なスタイルに惹かれる人は今も多い。ランドナーには角型のフロントバッグと横型のサドルバッグが似合うのだが、キャンプ道具の軽量化・コンパクト化を推し進めると、その2つのバッグ（容量20Lほど）だけに収まるようになった。ツエルトを採用すれば、冬キャンに必要なダウンウエアも入る。ランドナー自体には何も手を加えることなく、トラディショナルな帆布製のバッグを装備したスタイルのままで、キャンプ旅の選択肢として蘇生したのだ。

バッグの余力を、プラスαの遊び道具に割り振ることもできる。筆者の場合は海釣り一択だが、サイクリングやキャンプと一緒に楽しめる趣味はいろいろあるだろう。楽器なども似合いそうだ。調理道具を充実させてレシピを増やすのもいい。もちろん、余力を軽さとして温存して悪路やロングライドに挑むのも楽しい。軽量化・コンパクト化の恩恵を自由に使い倒してほしい。

ランドナーでキャンプ
モダンなグラベルバイクを導入してからというもの、すっかり髀肉の嘆をかこっていた我がランドナーだったが、キャンプ道具の軽量スリム化で出番到来。進化なのか退化なのかわからないが、急がない旅の魅力を改めて教えてくれる自転車だ。

遊びの道具を追加できる
ルアー釣りは、1カ所で粘っても釣れない時は釣れない。自転車なら堤防を効率良くハシゴできるので、釣果が期待できる。

フライパンがあると調理の幅が広がる。これを持つために他の道具をどうするか……パズルのように組み合わせを考える。

舗装が途切れた旧街道の峠をキャンプ装備で進む。軽量化がよりアクティブなプランニングも可能にする。

輪行を活用する

旅の可能性が飛躍的に広がる

鉄道や船舶、航空機といった公共交通機関に自転車を持ち込むことを「輪行」と呼ぶ。前後の車輪を外すなどしてコンパクトにした自転車を専用の輪行袋に収めれば、ほとんどの鉄道に無料で持ち込むことができる。大型のフェリーや渡船などはそのまま自転車を持ち込める場合もあるが、輪行袋への収納が求められるケースもある。航空機も輪行袋への収納が基本で、預け荷物とする。

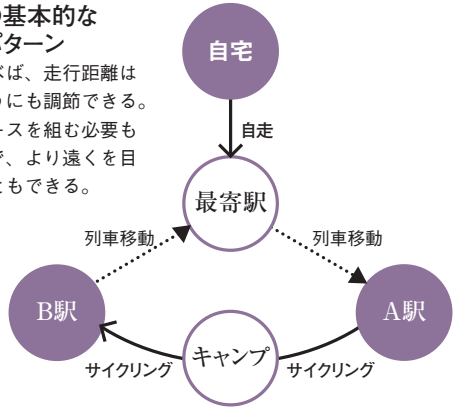
この輪行と自らが走る区間を組み合わせることで、プランニングの多様性は大きく広がる。輪行しなければ自宅を起終点としたコースしか組めない。クルマを利用する人も多いが、周回コースしか組めないので制約が多い。すでに輪行を実践しているサイクリストも多いことと思うが、自転車キャンプにおいても輪行は必須の移動手段だ。

本書ではキャリアレスのバイクパッキング式の装備に多くのページを割き、筆者もそのスタイルを愛用している。その最たる理由が、輪行のしやすさにある。キャリア、特にリアキャリアを装備すると、いったん外さないと輪行袋に収めることができない。これが非常に面倒だったが、バイクパッキングなら輪行に要する手間は少ない。後輪を外さない大きな輪行袋は、リアキャリア付きのまま収まる場合もあるが、鉄道に持ち込める規定サイズを上回ることが多いのでおすすめしない。

輪行を駆使すれば、全国どこでもあなたの遊び場になる。キャンプ場は選び放題で、走るルートも自由に決めることができる。ぜひ実践してほしい。

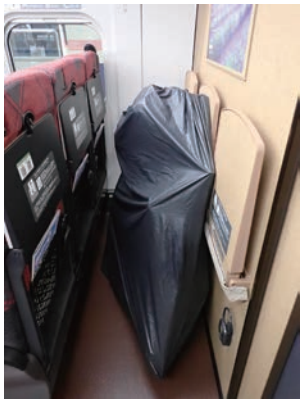
輪行の基本的な行動パターン

駆を選べば、走行距離はいかようにも調節できる。周回コースを組む必要もないので、より遠くを目指すこともできる。



鉄道
最も使い勝手がよい移動手段が鉄道。新幹線で遠くへワープするもよし、ローカル線の車窓を楽しむもよし。輪行移動の時間も楽しみだ。事前に駅の入り口と利用するホームの位置関係を調べておき、歩く距離を最低限にしたい。

駅で自転車の解体・収納を行う。人通りの多い場所は避けて作業しよう。慣れれば10分以内で作業は完了する。最近は輪行向けのスペースがある駅も増えたのがうれしい。



新幹線など特急型の列車が利用しやすい。車両後端のシート裏が輪行袋の定位置。通勤型車両は運転席の後ろなどが適している。

船舶
高速船などスペースが限られる船舶では、鉄道と同じような輪行が求められ、荷物料金が必要になることが多い。

航空機
預けるので不安を覚える人も多いが、鉄道と同じ薄手の輪行袋でまず問題ない。料金は航空会社次第（無料～4000円）。

Report

冬の北海道キャンプ旅

適切な計画と装備があれば、
自転車キャンプの
可能性は無限大。
それを実感できる冬の旅へ。

雪中サイクリングとキャンプは成り立つか

自転車キャンプといえば、真っ先に北海道を思い浮かべる人も多いだろう。旅人は先端依存症のような傾向があり、最北端や最東端が大好きだ。しかし、サイクリストには夏限定と思われているフシがある。果たしてそうだろうか。むしろ冬こそ感動的な体験ができはしないだろうか……、そう考えて、冬の北海道で自転車キャンプを初めて実践したのは2020年の新春だった。

その旅では、道北の音威子府から宗谷岬までの約200㎞を3泊4日で走った。キャンプ場は閉鎖されているので、すべて野良キャンだ。結果として宗谷岬に到達でき、氷点下10℃でもキャンプは快適だった。しかし、全日とも雪曇りで（だから氷点下10℃くらいで済んだともいえる）、期待していた青い空と雪景色の共演はお預けとなった。再訪を誓うが、翌年は新型感染症が世を覆った。そして2022年の新春。振り返ると瞬間的だったが、感染者数が底を打った。

満を持して、再び冬の北海道に降り立った。今回は道東だ。

世界に自分しかいないような錯覚
結氷積雪した網走湖で呆然とする。スノーモービルが走っていったので真似したのだが、自転車で新雪の上を走るのは無理だった。